

李默本朱子年譜について

— 明學の展開と連關して —

佐藤 仁

は し が き

朱熹の年譜は、朱熹の門人、李方子が先ず編纂したと伝えられており、以來、宋、明、清の各時代に亘つて各種編纂出版されているが、二十有餘年の歲月をかけ、精覈なる考證のもとに作られた、清朝の王懋竑の朱子年譜が出るに及んで、從來の朱子年譜は、おおむね朱子年譜としての存在價値を失つたといつてよいであらう。明の嘉靖年間に編纂された李默の朱子年譜とても例外ではなく、朱熹の傳記研究の材料として見るならば、ほとんど無價値である。従つて今ここで李默の朱子年譜を取り擧げる目的は、自ら別にある。即ち先ず李默は思想的には陸王學系統の學者でありながら、王學全盛の時期に、陸王と對立する朱熹の年譜をわざわざ編纂していることはいかにも不自然であり、そこには當然なならぬ波瀾が豫想される。次に李默の朱子年譜は、萬曆年間に再版されたが、形の上では陸王學徒、李默の朱子年譜の體裁をそっくり踏襲しているものの、その再版事業は、朱熹の子孫と、朱子學振興を計る人達とによつて行なわれた。この二つの事柄を中心としながら、その他の派生的な二、三の事柄について卑見を述べ、それによつて明代學術界の一端を伺つてみようとするのが本論の

李默本朱子年譜について

目的である。

—

朱熹の年譜は、朱熹の弟子、李方子（字は公晦、號は果齋）が先ず編纂したといわれているが、例えば明の正徳年間に戴銜が編纂した朱子實紀の凡例二に、「果齋李氏本、……存せざること久し。」とあるが如く、かなり早い時期に散佚したため、その詳細はすべて不明であり、李默が

世傳李果齋公晦嘗著紫陽年譜三卷、魏了翁爲之序。今其序固在、但云果齋輯先生言行、即不稱有年譜（李默本朱子年譜序）。

李果齋公晦が以前紫陽（朱子）年譜三卷を著し、魏了翁が序文を作つたと傳えられている。その序文は確かに在るが、ただ果齋が先生の言行を編輯したとだけで、年譜があつたとはいっていない、

と述べているが如く、果して年譜があつたかどうか、一抹の疑問がないわけではない。魏了翁の朱子年譜序なるものは、鶴山先生大全文集卷五十四を始めとして、右朱子實紀や、清朝になつて王懋竑が編纂した朱子年譜等にも収録されている。

朱子年譜の存在が、はつきり歴史上に現れて来るのは明代になつてからであり、洪武、宣德、景泰の各時代に、相繼いで朱子年譜が編纂・鈔梓されている（なお四庫全書總目卷五十九には、宋の袁仲晦撰、朱子年譜一卷の目を擧げているが、提要の記事以外は明らかにし得なかつた）。しかしながら、「宣德年間の婺源刻本は、はなはだ疎雑で、脱落が多い。」（朱子實紀凡例二）とか、また

朱氏今所存譜、蓋多出於洪武宣景間諸人之筆、與朱氏增益所成、斷非果齋之舊。其最謬者、先生歿後數十年間所得褒典、猶用編年之法、甚者尊朱詆陸、爲私家言。非述作體也。比侍御元山曾君佩、按閩至建陽。得其書讀之、頗疑冗脫（李默撰朱子年譜序）。

朱氏が現に所藏している先生の年譜は、洪武、宣德、景泰の各時代の人が編纂したもので、朱氏一族が勝手に増益した部分もあり、明らかに果齋（李方子）の原本ではない。最も間違っているのは、先生歿後の數十年間に朝廷から賜わつた褒典を、やはり編年の法を用いて記載していること、また特にひどいのは、朱を尊び陸を非難するような、私家の言をなしていることである。これらは述作の體裁にふさわしくない。最近、福建の按察使として建陽に赴任して來た侍御の元山曾君佩も、この年譜を手に入れて讀み、内容が疎雑で、餘分なものがあつたり、必要なものが缺けていたりしてゐるのではないか、との疑いをもつた、

などである如く、その評判は必ずしもよくなかつた。これらのうち洪武本を見るを得なかつたが、その序文は残つてゐる（例えば王懋菴の朱子年譜卷首等）。また宣德本についていえば、寛文六年、我が國で翻刻されている、所謂葉公同校朱子年譜が恐らくそれであろう。理由は次

の如くである。

一、孫原貞の手に成る宣德六年の序文が先ず大字で附されており、それ以前の洪武本の序文は收録されているが、宣德以後のものは全く見當らない。なおこの序文には、

新安婺源、乃朱夫子父母之邦。其先世丘墓舊居宅里咸在。……括蒼葉公同、來爲邑丞、既新厥廟、復以年譜舊刊本板、文字磨滅漫不可辨、謀欲重刊。爰得舊本、若行狀褒典記文、附於年譜之後者、與邑之儒士孫叔拱、悉加校讎、補其遺闕、正其訛繆、命工鈔梓、徵序於予。

新安の婺源は、朱夫子の父母の邦で、祖先の丘墓、舊居、宅里はすべて此處にある。……この婺源の邑丞となつた括蒼の葉公公同は、先ず朱夫子の廟を新築し、また文字が磨滅して讀みにくくなつてゐる舊刊本の朱夫子の年譜の再版を計畫した。そこで舊刊本を手に入れ、年譜の後に附されている行狀、褒典、記文について、婺源の儒士、孫叔拱と協力して、全文に校讎を加え、遺闕を補い、訛繆を正し、職人に命じて板木にほらせ、予には序文の制作を依頼して來た、

とあるが、これによればこの序文は、前述朱子實紀の所謂宣德年間の婺源刻本の序文であることは確かであろう。従つて今若し和刻本を、宣德本の翻刻とすることが許されるならば、この和刻本は、前述、朱子實紀の所謂婺源刻本と見てよいであろう。

二、この和刻本には、朱熹歿後の褒典が編年體で記載されている。これは前掲、李默の所言と一致する。

三、淳熙十一年の條に、陳陸兩學に對する朱熹の批判のことが少しく記載されている。これも李默の所言と一致する。

四、この和刻本の欄外の考異に、數々所、景泰本が引かれている。従つてこの和刻本が景泰本でないことは明らかである。

五、また現存する各種朱子年譜（實紀本、李默本、王懋竑本、及び王懋竑本所引の洪本、新聞本と比較した結果、そのいずれとも異なっている）。

四庫全書總目には、ここに挙げた各種朱子年譜の外に、なお二、三の異本を挙げているから、これらを参照しなければ決定的なことはいえないのであるが、以上の理由によつて、和刻本の朱子年譜を、一應、宣徳本の翻刻と考えてみた。次に景泰本であるが、既に述べた如く、この和刻本の欄外の考異に數々所引用されており、若しこの和刻本を宣徳本の翻刻と見てよいのならば、景泰本と宣徳本とは、大同小異のものであったと考えられる。その後、正徳年間になると、戴銑によつて朱子實紀が編纂され、従来より朱熹研究者に廣く利用されていく。次で嘉靖三十一年には、洪武、宣徳、景泰の各時代に編纂された朱子年譜の缺點を改めんとして、李默が新に朱熹の年譜を編纂して来る。九州大學文學部中國哲學研究室藏の、李默の序文を冠する嘉靖版紫陽文公先生年譜二卷附録三卷本がそれである。

二

李默、字は時言、號は古沖、甌寧の人。この甌寧は、現在の福建省建甌縣で、明代には建安とともに福建の建寧府に所屬していた。朱熹はいわば郷土の大先輩に當るわけである。正徳十六年の進士で、嘉靖年間、外吏より入朝して、吏部の侍郎、尙書と異例の拔擢を受け、最後には太子少保、兼翰林學士にまで昇進したが、その激しい性格の故であるうか、上司との衝突が絶えず、晩年には趙文華に陥し入れら

李默本朱子年譜について

れ、獄中で病死した。時に嘉靖三十五年二月のことである。明史卷二百二には、李默の人と爲りについて、

默博雅有才辨、以氣自豪。……然性褊淺、用愛憎爲軒輊、頗私鄉舊、以恩威自歸。

李默は博識で才氣と辨説にすぐれ、氣象の強い人であった。……しかし生れつき偏狹なところがあり、愛憎で優劣を決め、郷里の緣故者への依怙最眞がひどく、恩着せがましいところがあった、

と論評している。

李默の著書には、朱子年譜の外に、建寧人物傳四卷、孤樹哀談十卷、羣玉樓集八卷があり、いずれも現存している（内閣文庫藏）。

建寧人物傳は、唐の建中年間より、明の景泰年間に至るまでの建寧府出身者、およそ四百七十七人について、その傳記を集めたものであるが、これを郷土の先輩の顯彰事業と見るならば、李默が朱子年譜を編纂したのも、その事業の一環であったと見ることが出来る。四庫提要（傳記存三）は、この建寧人物傳を、「疎略の處、尤も多し」と酷評している。

孤樹哀談は、洪武より正徳に至るまでの明代の事蹟を記録したもので、引用書は三十種にも及ぶが、資料になつてゐるものは、おおむね民間の噂話の類である。千頃堂書目は、これを別人（正徳の舉人、趙可與）の作としている。いずれにしても素性のよくないものようである。

羣玉樓集は、文集五卷、詩集三卷より成る。李默の子、培が編纂したもので、原集は萬曆元年に刊行されている。このなかには歐陽徳（南野）、季本（彭山）等、陽明門下との間に書翰の往來があつたことを

示す材料があり、これらによって不十分ではあるが、李默の學的立場を知り得る（後述する）。

三

さて李默の朱子年譜について先ず注目されることは、前述の和刻本を、とりあえず宣徳本の翻刻と考えて、この李默の朱子年譜と比較した結果であるが、宣徳本には朱熹の「語」の引用がほとんど無いのに（紹興二十三年の條に二ヶ所ほどそれらしいものがあるだけ）、李默の朱子年譜になると、それが急に増加していることである（勿論、清の王懋竑の朱子年譜ほどではないが）。李默自身も舊刊本を考訂するに際し、朱子の行狀、文集と、語錄所載の資料とに據つたと述べている（朱子年譜序）。この點は本論と直接の關係はないが、明代前半に於る朱熹の「語」の學問的な價值、或は朱子語錄（語類）の流布状態がいかであったかを考える場合、一つの参考になるのではないかと思われる。因みに朱熹の語錄は、宋の咸淳年間に、黎靖徳の努力によって、語類大全本としての體裁が整えられ出版されてから、明の成化年間に至るまでの約二百年間は、どうも再版されていないようで、そのために明の成化年間に行なわれた朱子語類の再版事業は、よい材料を収集するのに非常な苦辛を拂っている形迹がある。

惜矣、板本今不復傳。間有傳錄者、又不免乎亥豕之訛也。三山陳君煒、自天順庚辰第進士爲御史、屢欲訪求善本而不得。成化庚寅副憲江右、始訪於豫章胡祭酒頤菴先生家得印本。中缺二十餘卷。明年分巡湖東、又訪於崇仁吳聘君康齋家得全本。而缺者尙一二。合而校補、遂成全書（彭時撰成化本朱子語類序）。

殘念ながら朱子語類の板本は、現在傳わっていない。時たま寫

本を見かけるが、どうしても誤寫を免れない。三山の陳君煒は、天順四年に進士に及第して御史となつてから、たびたび善本を探し求めたが、手に入れることが出来なかつた。成化六年、江右の副憲となつた時、豫章の胡祭酒頤菴先生の家を訪ねて、やっと印本を手に入れたが、二十卷餘りが缺けていた。その翌年、湖東を巡察した際、崇仁の吳聘君康齋の家を訪ねて、全本を手に入れた。これも一、二巻ほど缺けていた。そこで兩者を合わせて校補し、遂に完全な書物を作りあげた。

これは當時、朱子語類が稀覯に屬していたことを物語るもので、この成化年代に於る朱子語類の再版を境として、それ以前とそれ以後とは、朱子語類（語錄）の流布状態に相當の開きがあつたであろうこと、従つて朱熹の「語」の學的價值に對しても、成化以來、漸次理解者が増して來たであろうことが推察されるのである。これについては更に廣汎綿密な研究調査が必要であり、早急な決斷は避けねばならぬが、李默の朱子年譜に、朱熹の「語」の引用が急にふえているのは、このことと何らかの關連が考えられないであらうか。

四

李默の朱子年譜には、嘉靖刊本の外に、もう一つ別の刊本がある。それは萬曆二十九年に、汪國楠、金汝諧、吳養春、朱家楨、朱崇沐等の協力を得て、朱吾弼が重編した朱子年譜である（同じく九州大學文學部中國哲學研究室藏）。内容書式（二葉ごとの行数、一行ごとの字数）ともに、李默の嘉靖刊行の朱子年譜（以下、略して嘉靖本とよぶ）と全く同じであるから、嘉靖本に據つて重編されたものであることは、ほぼ間違いない。しかしながら二、三相違つる點もあるから、以下、これに

いて述べてみたい。その一つは、嘉靖本紹興十六年の條の、

按語録云嘉年十六七時喫了多少辛苦讀書

とある一文が、萬曆本では全く削除され、その部分だけが完全な空白になつてゐることである。その理由については確かなことはわからない。後述の如く萬曆本は、朱熹の子孫が、朱子學振興を計る人々と協力して發行したものであるが、苦勞して書物を読んだという意味のこの一文の掲載を、そのために憚つたとするのは思い過してであらうか（李默の原本も亦、朱熹の子孫の委囑によるものであることは、それに附せられてゐる朱凌の後序でわかるのであるが、李默自身は朱熹の郷土の後輩といふだけであつて、後述の如く、必ずしも朱子學に同情的ではなかつた）。もう一つの相違點は、嘉靖本淳熙三年の條の、

蔡元定從既至邑宰張漢率諸生請講書于學辭復請撰書閣記許之而以程氏遺書外書文集經說司馬氏書儀高氏送終禮呂氏鄉約鄉儀等書留學中日與鄉人子弟講學于汪氏之敬齋隨其資稟誨誘不倦又作茶院朱氏譜序至六月初旬乃歸

とある一文が、萬曆本では、

蔡元定從既至邑宰率諸生請講書撰書閣記許之而以程氏遺書等編留學中日與鄉子弟講論嘗與其徒滕璘遊見山水幽靜曰儼余疇昔夢中所也問其地對曰名緋塘璘業也先塚在此曰故與子有神交者在因命作亭于其上書草堂二字與之又作茶院朱氏譜序至六月乃歸

となつており、就中、後半の滕璘に關する記述は、嘉靖本と甚だ相違する點である。後、清朝になると、李默本、洪去蕪本、新閩本等、各種朱子年譜を參照しながら、朱子年譜の決定版ともいへべきものを、王懋竑が編纂したのであるが、その際、王懋竑が見たと考えられる李默の朱子年譜が、嘉靖本ではなくて、萬曆本であつたということが、

李默本朱子年譜について

この二番目の相違點から推察されるのである。即ち嘉靖本にせよ萬曆本にせよ、いずれも王懋竑の所謂李本朱子年譜であることは間違いないと思われるが、王懋竑の朱子年譜卷二、淳熙三年の條を見ると、王懋竑は萬曆本の一文中を李本のものとして引用し、嘉靖本の方は洪去蕪本のものとして引用してゐるのである。このことは王懋竑の見た李本が、實は萬曆本であつて、李本の原本である嘉靖本は見えていなかったことを示すものであらう。もしそうならば、この淳熙三年の條に關する限り、清初の洪去蕪本の方が、李默の原本を忠實に襲うていたといへよう。嘉靖本、萬曆本の兩者に關しては、その他、文字の異同も少しくある。一概にはいえぬけれども、おおむね嘉靖本の誤字を訂正したものであつて、本質的な改版ではない。

五

そもそもこの李默本朱子年譜なるものは、前述の如く、洪武、宣徳、景泰の各時代に編纂された朱子年譜に不満をもつた李默が、新しく編纂しなおしたものであるとされてゐるけれども、時恰も姚江の學、即ち陽明學の全盛時代に當つており、その影響を受けてか、朱熹關係の資料の取扱ひ方に多少問題があり、中には改惡といわざるを得ないような箇所もある。例えば紹興九年の條に引かれてゐる朱熹の語であるが、王懋竑の朱子年譜には、

某十數歲時讀孟子至聖人與我同類者喜不可言以爲聖人亦易做而今方覺得難

とあつて、朱子語類卷百四の原文に忠實であるが、李本では、「……聖人亦易做」で終つており、「而今方覺得難」とある末尾の一句が省略されてゐる。思想的にいえば、この一句があつて始めて、例えば朱

熹が好んだ「堅苦」(朱子文集卷六十四、答劉公度書、及び朱子行狀)という言葉に端的に示されているが如き、現實の人間が内包する矛盾を深刻に洞察し、それを克服して、聖人、即ち最も完成された理想の人間の域に達するためには、嚴肅敬虔なる功夫が必須であると考える朱子學の特色が正當に理解されるのであって、もし李黙が、この句を故意に省略して、むしろ孟子の立言の方に重きを置いたのであれば、「滿街の人、すべて是れ聖人なり」(傳習錄、卷下)とし、聖人を現實の人間の地位にまで引き下げて來ようとする陽明心學の立場に、朱熹の立場を近づけようとする意圖があったといわねばならない。王懋竑朱子年譜序の撰者、朱安國が、

明李黙古冲所定朱子年譜、多刪改原編、與晚年定論道一編暗合。陽爲表章、而陰移其宗旨。後之人不辯其僞、而尊信之、其爲害滋甚。

明の李黙の撰定した朱子年譜は、原編を刪改したところが多く、(王守仁の)晩年定論、(程敏政の)道一編の立場に暗合しており、表向きは朱子の表章であるが、内實は朱子の宗旨を移し變えている。後の人はその僞りに氣附かず尊信しているが、その害毒には甚しいものがある、

と述べ、李黙の朱子年譜には、朱熹の宗旨を改竄した跡ありとして批判する所以である(同様な批判は、洪璟撰洪去蕪本朱子年譜序—王懋竑本朱子年譜卷首所收—にも既に述べられている)。また朱熹は五十六歳の時、陸學と陳學との非を辨じたのであるが、このことを朱熹の年譜に記載した、洪武、宣德、景泰の各時代の年譜編者の方針を、李黙は、「私家の言であり、述作の體裁にふさわしくない」(前掲、朱子年譜李黙序)とし、關係記事をことごとく削除した。朱熹にその事實がなかったな

らともかく、あった以上、記載するのが當然であり、それを勝手に削除した李黙の處置は、むしろ改惡といわねばならない。この件に關して、四庫全書總目提要(卷六十)は次の如き説明を加えている。

朱子五十六歲、辨陸學之非、辨陳學之非。舊譜有之。惟李黙本刪去、以默傳金谿之學故也。

朱子は五十六歳の時、陸學の非と、陳學の非とを辨じた。舊刊年譜はこのことを記載しているが、李黙本だけが刪去している。それは李黙が金谿の學(陸學)の系統を引く學者であったからである。

六

ここで李黙の學的立場について觸れておけば、明代思想史のなかで、ほとんど無視されて來た事實が端的に示しているが如く、李黙の思想家としての特色には、見るべきものはないといえよう。李黙の詩文集である羣玉樓集を當ってみても、思想的に問題となるような資料は、極めて少ないのであるが、とりあえずこの羣玉樓集中に散見する僅かばかりの材料によつて、李黙の學的立場を調べてみると、おおよそ次の如くである。

今世學者、膠習舊聞、動以理氣別爲精粗二物。是何自背於孔訓也。夫天地之大德曰生、仁生理也。惟子思爲善學。其述孔子之言、曰、仁者人也。以人明仁、精粗安別。孟子又善述子思者也。曰、仁人心也。心爲理乎、氣乎。宋人不得於此、而曰、有義理之心、有血肉之心。此臆決之言、非孟氏之學。云云、(卷五、與陳盤溪憲副)

今世の學者は、舊來の傳聞に堅く馴染んで、ややもすれば理氣

を區別して、精粗の二物としているが、このようにわざわざ孔子の訓えに背くようなことをしているのは何故であろうか。

「天地の大徳を生という」とある（孔子の言葉の）ように、仁とは生々の理なのである。孔子の訓えを善く學んだ子思は、孔子の言葉を祖述して、「仁は人である」と述べている。人で仁を明らかにしているとするれば、どうして精粗を區別し得ようか。また子思の學を最もよく祖述した孟子は、「仁は人心である」と述べている。孟子は果して心を理としているのであろうか、それとも氣としているのであろうか。宋の人は、ここがわからず、心には義理の心と血肉の心とがあると述べているが、これは宋の人が勝手に推定した言葉であつて、決して孟子の學ではないのである。云云。

これによれば、李黙は、理氣を嚴密に區別し、理を精として貴び、氣を粗として蔑む宋人の立場（即ち程朱の立場に外ならない）に強く反對し、理氣を分ち得ない渾一的具體的な人心を基として、そこから儒學の理想である仁の實現を考えていることがわかる。かかる心を重んずる立場は、宋代にあつては、孟子の學を心學とし、その心學の立場を繼承するものと主張した陸學の特色であることは周知のことである。また王愨の朱子年譜考異卷一の細注に、

李果齋元本、不可見。今行世者、有李洪閩三本。李爲陽明後人、多所刪改。云云。

李果齋（方子）の元本は見る事が出来ない。現在、世の中に流布している朱子の年譜には、李（黙）、洪（去蕪）、（新）閩の三本がある。李黙は陽明の後人であり、そのために李黙の朱子年譜には、刪改した所が多い。云云、

李黙本朱子年譜について

とある如く、李黙を王守仁の後學と見ているものもある。李黙は年代的には王守仁より一世代後の人と思われるが、例えば王守仁の弟子、季本に答えた書簡に、

竊聞、陽明先生之學、惟執事傳之。獨早奔走塵途、未有質疑之便、乃今獲聞緒論、何幸何幸。云云、（羣玉樓集卷五）

陽明先生の學を傳えている人は、貴方をおいて外にはいない、とお聞きしておりましたが、私、早歳より官途に就いたため、質疑の機會に恵まれませんでした。この度はからずも御高説の一端を拜聴出來、喜びにたえません。云云、

とあるが如く、間接的にはあるが、王守仁の學問に並々ならぬ關心を寄せていたことがわかる。またこの季本に答えた書簡の要旨は、「主宰を貴んで、自然を惡む」（明儒學案卷十三）と評された季本の學の特色を最もよく表明しているといわれる龍惕の説を批判しながら、且、それでもつて王守仁の良知説を祖述することの誤りを指摘したものであるが、その言説の端々には、李黙が日頃から王守仁の著述に親しんでいたことを示すに足るものが現れている。

尊教以龍喻心、以惕喻心之用。雖未盡協於經旨、然乾健之徳、宰物之義、寔得之於引申觸類之餘。豈惟擴陽明之所未發、亦恐從前無此議論。眞足以羽翼心學、隄障流弊、敬服敬服。用是輒敢僭伸鄙見、少答不棄之雅。惟執事幸終教之。夫龍者備體純陽、飛潛變化、乃其能事、故號爲神物。警惕二字、恐不足以言之。況心之本體、自能應物、其不能者本心放失耳。惕惕治心法也、戒懼恐懼之類也。以言乎本體則非也。今以龍惕明良知、得少戾乎。且良知猶言明德耳、此陽明宗旨也。今訓知爲主、以求合於龍惕之説、是耶否耶。心體本明、其取譬於鏡者、謂其如鏡之能別妍媸也、非謂妍

熾去來一任自然也。止水云者、不澆不濁之謂、澄清之至、足鑑毛髮。寂然不動、感而遂通、氣象正復類此。執事何爲過疑耶。僕聞、聖人之德、乃龍德也。今舉變化神妙之物、以齊一切之人心、將無陵躡之患乎。其失或使人習爲機巧變詐而已。夫以無情爲自然者、固未免流於異端、而意必將迎、又犯正助之戒。執事龍惕之喻、意必折衷於此矣。近日議陽明之學者、率病其直捷傲誕、而忘精切警省之功。執事豈欲救正調停之乎。云云(同上)。

龍を心に譬え、惕を心の用に譬える御教示は、經旨に完全に合致しているとはいえませんが、類推敷衍の結果、乾の剛健の德、宰物の義を眞に理解し得たもので、陽明先生がいわれなかつたことを發展させただけでなく、今までにもなかつた議論でしょう。心學をたすけ流弊をふせぎとめるに足る御意見、敬服いたしております。ここに鄙見を述べ、御芳情にお答えしようと思ひますが、お教え願えれば幸です。そもそも龍は、純陽の體を備えたもので、飛潛變化という特殊能力によつて神物といわれております。ですから警惕の二字で、龍を説明するのは不十分ではありませんまいか。まして心の本體は自ら物に應ずることが出来るものであります。それが出来ないのは、外でもありません、本心が失われているからです。惕々とは心を治める方法であり、戒懼恐懼の類でありますから、それで本體のはたらしを説明するのは、少し間違つてはおりませんか。また今、貴方が龍惕で良知を説明しようとなさるのも、少し間違つてゐるのではないのでしょうか。良知は明徳のことであるとすると、陽明先生の宗旨であります。今、良知の知を主の意味に解釋して、龍惕の説に合わせようとなさるの、果して正しいといえ

ましようか。心の本體はもともと明らかかなもので、それを鏡に譬えるのは、鏡が美醜をよく識別することをいっているの、美醜が映つたり消えたりするのを自然にまかすという意味ではありません。また止水というのは、波も立つておらず、濁つてもいない水のこと、この水で心の本體を譬えるのも、澄みきつた水が、毛髪のような微細なものまでもよく識別するからであります。易に「寂然として動かず、感じて遂に通ず」とあるのと全く同じ氣象です。それなのに貴方がいらぬ疑いをもたれるのは何故でしょうか。聖人の徳こそ龍徳にふさわしいと聞いております。今、變化神妙の物を擧げて、すべての人の心を同じものと考えるのは、行き過ぎではないでしょうか。悪くすると人々に機巧變詐を習いおぼえさせるだけです。さて情が無いことを自然とするのは、確かに異端に流れやすいのでありますが、意必將迎も、「正めすること勿れ、助長すること勿れ」といふ孟子の戒を犯すことになります。貴方の龍惕の説は、きつとこの兩者を折衷して弊害を救おうとしたものにならぬやうありません。また近頃、陽明先生の學を批判するものの中に、その直捷傲誕なのを缺點として、精切な警省の功夫があることを忘れてゐるものがあります。貴方の龍惕の説は、その誤解を正して、仲を調停しようとするものでしょうか。云云。

以上によつて、少くとも李黙の學的立場が、陸王心學の埒内にあつたことは、ほほ察せられよう。このように陸王學の埒内にあつて、程朱の學を批判した李黙が、陸王と對立する朱熹の年譜をわざわざ編纂してゐるのは如何にも不自然であり、そこには何らかの波瀾が豫想されるのであるが、朱熹の宗旨の改竄が、つまりその結果であつた。こ

のことは王守仁の朱子晚年定論、或は程敏政の道一編などと同類の書物として、この李黙の朱子年譜を、思想が人により時代により如何に歪められて来るかを示す材料の一つに加えてもよいことを物語るものである。

七

ここで再び李黙の朱子年譜に話をもとせば、李黙本紹興十九年の條の朱熹の語の引用の仕方などは、王懋竑本に比較して、その資料の取扱方がいかに杜撰であるかを示す一例であろう。即ち王懋竑本では、

某從十七八歲讀孟子至二十歲只逐句去理會更不通透二十歲已後方知不可恁地讀元來許多長段都自首尾相照管脈絡相貫串只恁地熟讀自見得意思從此看孟子覺得意思極痛快葉賢孫

某自十五六時至二十歲史書都不要看但覺得間是間非沒要緊不難理會大率才看得此等文字有味畢竟粗心了林慶孫

某舊年思量義理未透直是不能睡初看子夏先傳後倦一章凡三四夜窮究到明徹夜聞杜鵑聲王通

某舊讀仲氏任只其心塞淵終溫且惠淑慎其身先君之思以勗寡人既破我斧又缺我斨周公東征四國是皇哀我人斯亦孔之將伊尹曰先王肇修人紀從諫弗拂先民時若居上克明爲下克忠與人不求備檢身若不及以至于有萬邦茲維難哉如此等處直爲之廢卷慨想而不能已覺得朋友間看文字難得這般意思某二十歲前後已看得書大意如此錢木之

とあり、朱子語類の原文におおむね忠實であるが、李黙本には、從十七八歲讀孟子至二十歲只逐句理會更不通透二十歲後方知只恁地熟讀自見得意思

又云自十五六至二十歲史書都不要看但覺得沒要緊不難理會

李黙本朱子年譜について

又云二十歲前得上蔡語錄觀之初用朱筆畫出合處再觀用粉筆三觀用墨筆數過之後全與元看時不同矣
又云二十歲前已看得書大意如此

とあり、前後の文章が必要以上に省略されており、それでも意味が通ずればともかく、なかには支離滅裂で意味がわからないものもある。

一般に明代に出来た文獻が疎雑であることは、明人杜撰の語がある如く、定評のあるところであるが、李黙の建寧人物傳を、「疎略の處、尤も多し」。(前出)と提要が酷評しているのと思ひ合わせると、李黙には特にその傾向が強かつたようである。その他、淳熙十五年の條所引の朱熹の答陸子靜書であるが、朱子文集(卷三十六、和刻本十丁表)では、「雖有二名、初無兩體」とあるのを、嘉靖本では、「雖名二物、豈無兩體」、萬曆本では、「雖名一物、實無兩體」となっているが如き、萬曆本の方はともかくとして、嘉靖本では人の誤解をまねく恐れなしとしない。また朱熹の事蹟を年代順に配列する仕方にも不正確な點が多々ある。これについては王懋竑が年譜考異のなかで一々駁正を加えているから、ここでは省略する。いづれにしても年譜編者、李黙の朱熹に對する誠意が疑われよう。李黙は朱子年譜の編纂に當つて、朱熹を「先生」と稱せず、「朱子」と稱している。これについて王懋竑は、

李本稱朱子、洪本稱先生。年譜朱子門人果齋李公晦方子所輯、自合稱先生。李蓋以意改也(朱子年譜考異卷一)。

李本は朱子と稱し、洪本は先生と稱している。年譜は朱子の門人である果齋李公晦方子が編輯したものであるから、當然先生と稱すべきである。李黙は恐らく故意に改めたのであらう、と述べている。ここでも李黙の朱熹に對する誠意が疑われている。

八

最後に、萬曆本朱子年譜について一言觸れておけば、前述の如く、二、三の相違點はあるが、内容書式ともに嘉靖本と全く同じものである。但し卷首に編者の欄を設けて、左記の人物を配列している點は、嘉靖本と異なっており、注意を要する。

宗後學監察御史高安朱吾弼重編

後學禮部郎中婺源汪國楠

後學婺源知縣當湖金汝諧

後學中書舍人古歙吳養春同校

後學婺源教諭新淦朱家楨

十三世孫翰林博士朱德洪同閱

十三世孫庠生朱崇沐訂梓

さて次に萬曆本に據って翻刻された和刻本朱子語類大全の卷首を見ると、

宗後學監察御史高安朱吾弼重編

邑後學禮部郎中 汪國楠

邑後學禮部主事 江起鵬

浙後學婺源知縣嘉興譚昌言

宗後學婺源教諭新淦朱家楨同校

宗後學中書舍人休寧朱家用

歙後學中書舍人 吳養春

歙後學光祿寺署丞 吳勉學

十三世孫翰林院博士朱德洪同閱

宗後學庠生高安朱家記

十三世孫庠生 朱崇沐校梓

とある。この兩者を見較べると、朱氏一族を中心とする、大體同じ成員によつて、しかも時を同じうして、朱子年譜（萬曆二十九年）と朱子語類大全（萬曆三十一年）の再版事業が行なわれたことがわかる。ところでこの萬曆本の朱子語類大全には、葉向高（當時の政界の有力者。この人は和刻本二程全書の原本である徐必達校萬曆三十四年刊二程全書の序文でも書いている）、朱吾弼、汪應蛟の序文が載せられており、この三人が異口同音に述べていることは、新學に對する非難である。

近世之爲新學者、好齟齬朱子。其始直朱子耳。浸淫不已、且及孔子。蓋至今日、士大夫修瞿曇淨土之業、其卑皆洙泗家言、以爲不足當靈山之下乘者、喙爭鳴也。……而今之人、爲簡易、爲直截。言之甚可聽也。而其寔無可遵、無可守。夫無可遵、則其途愈歧。無可守、則必蕩然于規矩準繩之外。然則今之所謂簡易與直截者、皆惡吾道之拘、而逃焉以自便者也（葉向高序）。

近世の新學を修めるものは、好んで朱子の惡口をいう。始めは朱子だけであるが、それが昂じてくると、最後には孔子さえも非難するようになる。今の士大夫は釋氏の教を修め、孔子の學説は、佛教の中のごく低級な教理にさえ及ばないと、口々にい争っている。……今の人は簡易とか直截とかいうことをいう。いかにも尤らしく聞えるが、實際には遵い守るべきものは、何もないのである。遵うべきものがなければ、道はいよいよ分裂してしまい、守るべきものがなければ、必ず規範からはずれて、取留めがなくなつてしまおう。従つて今いわれている簡易とか直截とかは、皆、吾が道の拘束性を嫌つて、それから逃げ出すための口實に過ぎないのである。

自新學一唱、而黯者和、合禪悅以佐其燭。士皆化爲夷狄、其視先生成言如所云居敬窮理下學上達者、且以爲弁髦、且以爲土梗。
(朱吾弼序)

新學がたたび唱えられると、小賢しいものたちがそれに雷同し、禪的な悟りの樂しさを加味して、勢力の擴張をたすけていゝる。士は皆感化されて夷狄となつてしまひ、朱先生の居敬窮理、下學上達の學を全く無用のものと見なすようになった。

近世學士大夫、厭故常而驚奇詭、憚拘檢而樂簡易、一倡百和、至標空寂爲上乘。無論詆背朱子、且併孔子而弁髦之。(汪應蛟序)

近世の學者は、常道にあきて奇拔に馳せ、拘束を嫌つて簡易を樂しみ、一人が唱えると百人がその眞似をし、空寂こそ最上乘の道であると、公然と主張するようになった。朱子の惡口は無論のこと、更には孔子をも併せて無用のものにしてしまつていゝる。

この三序は、いずれも萬曆三十一年の作であるが、その前の年、即ち萬曆三十年は、人心惑亂の罪によつて獄舎に繋かれた李贄が自殺した年であり、またこの李贄の學によつて代表される新學猖狂の弊を極言して、その影響を教育界から拂拭すべきことを進言した禮部尙書、馮琦の上奏文(日知錄卷十八、科場禁約の條に全文が掲載されている)は、萬曆三十一年のものであり、その論旨は、前掲、朱子語類大全の三序の論旨とほぼ同じであることからすれば、萬曆版朱子語類大全三序が口を極めて非難している新學は、李贄によつて代表される王學の亞流であることは確かである。従つて萬曆年間に於る朱子語類大全再版の事業は、當時全盛を極めた王學の亞流に對する朱子學徒の反撥であつたと見ることが出來よう。とすれば朱子語類大全と大體同じ成員によ

つて行なわれた朱子年譜の出版も、形の上では陸王學徒、李默が編纂した朱子年譜の體裁を襲うてはいるものの、その動機は朱子語類大全の場合と全く同じであつたと考えられるのである。蓋し明末清初にかけて、王學亞流の弊害が痛切に反省され、朱子學の規範性尊重の精神が再び認められて來るのであるが、前述、馮琦の上奏文などとともに、この朱熹の子孫が中心となつて行なつた朱子年譜、朱子語類大全の再版事業は、外からその氣運を助成したものと見えよう。そしてこの萬曆本朱子年譜再版事業の精神は、その後、清初の朱子學者、王懋竑によつて受繼がれ、名實ともに朱子學のものである朱子年譜が、精覈なる考證のもとに編纂され、それとともに従前の各種朱子年譜は、すべて發展的に解消され、歴史的な役割りを終えたのである。

(追記) 本論の作成に當り、九州大學助教授荒木見悟氏より、羣玉樓集に關する資料を拜借した。記して厚く感謝の意を表す。